

国連大学初代事務局長  
国連システム元国際公務員日本協会会長

## 伊勢桃代 君

【いせ ももよ】

東京生まれ、京都育ち。1959年文学部哲学科社会学専攻卒業。シラキュース大学で社会学修士号、コロンビア大学で都市計画修士号を取得。国連ニューヨーク本部にて社会・経済開発担当を経て、国連大学の初代事務局長に。その後、ニューヨーク本部で人材開発部長。女性のためのアジア平和国民基金の元専務理事兼事務局長。

## 世界の時事問題に関心を抱き、 活発な議論を通じて 自分の意見を持つ大切さを学んでほしい

**60年代、ケネディが提唱した  
貧困撲滅政策の現場で働く**

——伊勢桃代さんは、国際連合で長きにわたって仕事をされ、日本に本部がある国連大学の初代事務局長も務められています。まず、国連で仕事をしようになったきっかけを教えてください。

**伊勢** 1960年代のアメリカは、ケネディ大統領がスタートさせて、ジョンソン大統領が引き継いだ、貧困撲滅と公民権の確立を目指すグレートソサエティ政策推進の真っ最中でした。その頃の私は、シラキュース大学マックスウェルスクールで社会学修士号を取った後、ハーバード大学に移って学んでいました。そんな私に、アメリカ政府による反貧困政策と関連し、ニューヨーク州シラキュースにおいて貧困政策関連の研究部長となる依頼が来ました。東洋人の若い女性研究者にオファーを出すのですから、リベラルな社会をつくろうと意欲に満ちた当時のアメリカは、改革の熱気とともにオープンな鷹揚さも併せ持っていました。

次にニューヨーク市の反貧困政策の現場で仕事をしました。ハーレム地区など、市内の貧困地域をくまなく回り、国庫から出た補助金が実際にどのように使われ

ているのかをワシントンに報告するので。時には白人職員と黒人職員が対立する場面もありましたが、私はどちらにも属さない中立的な存在と思われていたのか、皆さんフレンドリーに接してくれました。

——その後、伊勢さんは国連の正規職員、いわゆる国際公務員になったわけですね。  
**伊勢** 国連入りのきっかけとなる出来事がありました。ある日、ニューヨークタイムズ紙に、市民権のないイスラエル人がコンピュータスペシャリストとして働いているのは違法ではないかとの記事が出て、外国人労働者、特にアメリカ国籍を持たない専門家の問題がクローズアップされたのです。研究者には鷹揚な国ですが、外国籍の人が正式に働くとなると、やはり批判が出ます。そんな雰囲気の中でアメリカ社会の一員として働くことに限界を感じ、国際的な分野で自分を伸ばしたいと思ったのです。そこで国連のドアを叩きたいと願いました。

——国連ではどんな仕事をして、どのようなことを感じましたか？

**伊勢** 最初の仕事は、社会開発に関するアジア各国の報告書を



作成することでした。教育、格差、貧困、人種など社会のさまざまな面を評価するのですが、私自身は現地に行くことはありません。国連の重要な役割のひとつは、統計データの収集です。各国にいろいろな質問をしてデータを収集し、それをまとめて総合的に見て判断し、報告書をつくりまします。シラキユース大学で統計の勉強をしたことが役に立ちました。

国連ではすぐに仕事を任せられます。それもこんな大きなテーマでやっていいのかしらと感じるほどの仕事です。ただ大学を卒業しただけでいい仕事をするのは、なかなか難しいと思います。キャリアを積んだ、あるいは積んでいる途中であっても、自分の意見を持ち、実際に仕事ができることが重要です。ですから誰もが一匹狼的な要素が強いですね。もちろん

私も自覚しています。と言うのは、私は国連で働きましたが、国連に就職したという言い方を絶対にしません。なぜなら、社会学を学び、社会をよくしたいという目標を常に持ち続けている一人の人間だからです。国連を出てからもアジアの女性の社会問題に関わるなど、目指す目標は変わりません。

——女性として働きにくかったことはありませんでしたか？

**伊勢** 現場で仕事をしている限り、女性への差別はまったく感じませんでした。当時はまだ、世界中のほとんどの国で女性の地位が低かったのですが、国連憲章で男女平等をうたっていますから、その面では先進的でした。ただ管理職となると、やはり男性が優位でした。現在では男女比はほぼ半々になり、管理職でも男女平等になってきていると思います。

——国連大学では初代の事務局長として活躍されています。

**伊勢** 日本に本部が設置される国連大学は、ウタント事務総長の国連総会での提案によるもので、当初は明石康さんが進めていたのですが、明石さんがいったん日本の外務省に移ることになり、大学設立のための担当官としてその後を引き継ぎました。まずはニューヨーク本部で準

備室をつくり、その後日本の帝国ホテル内に事務所を置いて理事会を立ち上げ、国連大学設置につき本部協定作成のため、国連法務局と日本政府の交渉に参加しました。国連大学として機能し始めたのは1975年からです。

国連大学の初代学長はジェイムス・ヘスターさん。ニューヨーク大学の学長だった方で、アメリカ政府からの寄付金を集める能力のある方として迎えられました。私個人としては国連大学の学長には学者ではなく、司馬遼太郎さんのように、世界的な視野を持ち、歴史感覚に優れ、将来に夢を描ける人がふさわしいのではと思っていました。

ただ初代学長はいい仕事をしました。学問分野は、経済学、社会学など縦割りになりがちですが、この垣根をなくして、飢餓、自然資源、社会開発などのテーマ別に研究を進める方式にしたのです。これは彼の功績です。

発足当時の国連大学には、学生も教える教員もいなくて、なぜ大学なのか、という声がありました。実際のところ国連大学は、大学というより研究本部といふべきもので、ガーナのアフリカ自然資源研究所、フィンランドの世界開発経済研究所など、世界各地十数カ所にある研究

所のヘッドクォーターの役割を果たしているのです。当初の目的のひとつは、世界的になかなか認められるチャンスが少ない開発途上国の研究者たちに活動の場を提供することでした。その目的は、テクノロジーのおかげもあり果たされ、現在は

あらゆる国の研究者が世界中で自由に活躍しています。また、2010年からは学位課程プログラムがつくられ、大学院大学の機能も備えました。

——国連大学が軌道に乗った後、ニューヨーク本部に戻り、管理局人材開発部長として職員の採用試験や研修などに携わったそうですが、将来国連など国際機関で働くには、学生時代にどのようなことが大切ですか？

**伊勢** まず、世界の動きに興味を持ち、関心を寄せることです。大学でも、日々の時事問題を取り上げてディスカッションでできる場があればと思います。時事問題には政治、経済、宗教、人種などあらゆるものが複雑に絡んでいます。物事を多面的に見て、他の人の意見を聞き、自



アメリカ勤務の頃の伊勢君

分の意見を言う。これほど役に立つ生きた教材はありません。

国際機関で働くには、という質問でしたが、極端に言えば、国連には純粹な研究者は不要なのです。それより、さまざまな研究成果を生かして、実際の人間生活に役立つ政策をつくることのできる人が必要です。その前提として世界に関心を持ち、議論をする習慣を身につけ、自分の意見を持つ人間になってください。

### I.I.R.の4期生。活動を通じて留学への思いが高まった

——義塾に入学したきっかけ、そして義塾時代の思い出を聞かせてください。

**伊勢** 高校時代に、社会学を専攻する意志は固まっていた、東京の大学に行きた

かった。父に話すと「義塾なら行ってもよろしい。ほかは駄目だ」と(笑)。父は義塾育ちで、小泉信三先生の熱烈なファンでしたから。

当時の義塾には粹な教授が多かったですね。国文学の池田彌三郎先生、中国文学の奥野信太郎先生、研究室の指導教授だった有賀喜左衛門先生からは家族制度、封建社会、商品流通の仕組みなど、社会学の面白さを教わりました。卒論は京都祇園の芸妓社会がテーマ。貴重で面白いとAをいただき、アメリカの文化人類学の学会で発表するというおまけも付きました。

英語が好きで、「K.E.S.S. (慶應義塾大学英語會)」に入っていたのですが、その後「I.R. (慶應義塾大学国際関係会)」の活動に重点を移しました。I.R.は、塾生を海外へ送り出すとともに、海外からも受け入れる国際交流のための学生組織で、私は4期生でした。海外からの学生を受け入れるための資金集めが大変で、先輩たちは当時の政治家のところまで行って、国際交流の意義を説いて協力をお願いしていました。ダンスパーティーを頻繁に開いたのも資金集めのためです。熱心にサポートしてくれたのが、『福翁自伝』の英訳でも知られる清岡暎一先生。

温和な紳士で、いろいろと助けていただきました。

提携校のスタンフォード大学、ブリテイッシュコロンビア大学などから来た学生に東京案内をしたり、彼らとさまざまなテーマでディスカッションしたりすることは、とても刺激的な経験でした。私は、この活動を通じて留学への思いが高まり、卒業後アメリカの大学に行くことになるのです。

現在、I.R.の活動はますます盛んになり、多くの塾生を海外に派遣し、また招



I.R.の創設グループ (前列左より2番目が伊勢君。前列右から2番目が清岡先生)

待した海外の大学生と相互理解を深めています。

——先ほど、世界の時事問題に関心をもち、自分の意見を持って議論をしながら、アドバイスをいただきましたが、そのほか塾生へのメッセージがありましたらお願いします。

**伊勢** 戦中生まれの私は、戦争終結に深く安堵し、農地改革や財閥解体が大きな社会変革をもたらして、日本人が平等に、ひとつにまとまれたという意識を強く持つことができました。また新しい平和憲法を心から喜びました。ひとこと言えば、明るい未来が見えていたのでしょ。さて、これからの日本のことを考えると、2060年には人口が3分の2の約8700万人になるという推計が内閣府から出されています。その未来を担っていく塾生に望むことは、決して内向きにならないでほしいということ。かつてG5、G7といわれた先進国が世界を動かしていた時代とは異なり、G20の時代となりました。変化を続ける世界にしっかりと目を向け、より強く、深くつながることが、日本にとっても、若い皆さん一人ひとりにとっても、とても大切なことだと思います。

——ありがとうございます。